

## 指名コンペティションの実施結果について

第 16 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展－日本館キュレーター指名コンペティションにおいては、7 名の候補者に展示企画に関するコンペティションへの参加を依頼したところ、うち 6 名の方からご提案をいただきました。

氏名	展覧会テーマ
阿部 仁史 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)	Walls of Titan 巨人の壁
小淵 祐介 (東京大学大学院工学系研究室建築学専攻准教授)	Resonance 共鳴する空間
貝島 桃代 (アトリエ・ワン、筑波大学芸術系准教授、スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授)	Architectural Ethnography from Tokyo : Guidebooks and Projects on Livelihood 東京発 建築民俗誌 - 暮らしのためのガイドブックとプロジェクト
田瀬 理夫 (株式会社プランタゴ代表取締役)	PASSIVE ARCHITECTURE & ACTIVE LANDSCAPE with NATURE 建築は敷地を超えて緑をつなげるか？
中島直人 (東京大学工学系研究科都市工学専攻准教授)	POLY-CULTURAL URBANISM - towards a post “Olympic City” - 東京の文化資源をプロジェクトし、編集する
橋本 純 (株式会社ハシモトオフィス代表取締役)	Freespace/「起こり」の場所/ヴェネチアの空中井戸広場

(候補者氏名五十音順、敬称略)

各委員の選評は次のとおりです。(委員長以下氏名五十音順/敬称一部略)

**松本透(国際展事業委員会委員長・長野県県民文化部信濃美術館整備担当参与)**

巨大な公共土木建造物(東北4県の防潮堤)の建設プロジェクトを検証するプラン、現代社会の過剰な視覚依存性への対案として音の身体性・空間性の可能性を探るプラン、建物の敷地限定性を超える要因として「植生」や「ランドスケープ」を再考するプラン、都市や文明の起源ともいえる水の公共性(=井戸)を空間化するプランなど、応募案はいずれも現代の都市や建築をめぐる難題に関わるものだった。そのなかで貝島桃代の「東京発、建築民俗誌——暮らしのためのガイドブックとプロジェクト」は、貝島らによる「メイド・イン・トーキョー」プロジェクト(展覧会および建築ガイドブック、1996年～)が世界各地で呼び起こした同趣向のガイドブックなどを総覧しながら、ディスカッションの深化をはかるものである。建築はもともと複数の機能を一つの箱に——できれば美しいフォームに——収めたものであるが、貝島のいう「建築民俗誌」とは、建築の裏事情たる雑多な機能の雑居性の露呈に着目して、建物の使用者の視点で建築の生態なり、都市の現実にアプローチする試みといえる。ゼロからの創造ではなく、正負の雑多な遺産を遣りくりしながら如何にして未来を構想するかという方向に議論をシフトさせるのである。日本の現代建築、都市環境の地域性に立脚しながら、地域を超えたグローバルな課題に応えるという点で、国際建築展日本館にふさわしいテーマ設定といえよう。

**金田充弘(東京藝術大学准教授)**

第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館キュレーター指名コンペティションで、6名からの提案を受けた。それぞれ全く異なるアプローチであったが、現在の日本から発信するに値する意義深い提案であった。

その中で、総合ディレクターのグラフトンアーキテクツの2人が掲げた”Freespace”というテーマに託された、建築の背後にある寛容な精神や、空間の読み替えにより誰もが享受できる長期的な価値という観点から、貝島桃代氏の「東京発 建築民族誌——暮らしのためのガイドブックとプロジェクト」が最も相応しいと思った。総合テーマとの合致とは別に、日本館として発信するメッセージとして、日本側が伝えたいと思う日本人的な視点ではなく、受け手となるグローバルなオーディエンスに伝わり、訴えかけ、共感されうるテーマかどうかを判断の基準とした。

日本人建築家の評価が高い一方、日本から発信した建築文化がグローバル化することは稀な中で、「メイド・イン・トーキョー」が建築ガイドブックというフォーマットとして世界中でハッキングされていることは、実に驚くべき状況である。ときに多少の誤読や誤解がありながらも、生活者の視点による建築や都市の社会的共有ツールとして、ローカライズされながら草の根的に増殖してきた広がり进行分析することは、1つのフォーマットを通して世界中の普通の人々の暮らしの現状を映し出し、議論のベースとすることに非常に適していると思う。東京から発信しながら、東京を特殊解として扱わないスタンスも良い。そして、国境を越えたどのコピー本からも滲み出るユーモラスでポジティブな自分達の街への視線が、肩の力の抜けた未来志向の議論を呼び起こすことを期待する。

### 倉方俊輔(大阪市立大学准教授)

前回の第15回ヴェネチア・ビエンナーレ2016国際建築展から、従来「コミッショナー」と称していた立場が「キュレーター」という名称に変わった。より明快であるし、建築展におけるキュレーターの立場とは何か、というヴェネチア・ビエンナーレの場に限らない一般的な問題が提起されていて、これは良い変化だと思う。

6名の候補者の案は、このキュレーターの立場を巡って、2つに分かれて受け取れた。キュレーターのメッセージを伝えるように展示対象が編まれているものを「前者」と呼ぶことにすると、貝島案、中島案、田瀬案がこれに当たる。「後者」は阿部案、小淵案、橋本案で、メッセージが確定し難い、多様な読みを提供するものに感じられた。

この建築展のキュレーターに求められる基本的な要素は、内容が自らの個展にならないこと、それに、世界に発信するメッセージ性を備えていることだろう。すると後者は、メッセージが言語で表しにくく、展示内容の具体的な方向性にまでキュレーターが立ち入らざるを得ないのだから、一見そぐわないように思える。ただ、本当にそうなのだろうか。勉強の成果だけではなく、まだ見えていない世界の始まりを、ここで、手探りしながら現出させることも、アートと隔年で並走するヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展の可能性ではないか。

そのように考えさせる力を、阿部案、小淵案、橋本案は持っていた。荒削りな部分はあっても、まとめ上げてくれるだろうという期待が抱けた。中でも阿部案は、優れたバランス感覚と美によって、そのものを見ようとする対象に目を向けさせる、アートに比する手応えが期待され、すぐに言語で表しやすいものにしたがるこの世の中に投入したい内容だった。

もちろん、貝島案「東京発 建築民俗誌—暮らしのためのガイドブックとプロジェクト」は素晴らしい内容だ。対象も的確で、展示構成も手馴れている。まさに2018年に行うべき展覧会だと思う。

### 曾我部昌史(神奈川大学教授)

それぞれに個性的な6つの提案があった。どの提案も、今日の日本での建築にかかわる特徴的な状況を、それぞれの関心を手がかりに展開したもので、興味深いものばかりだったが、評価できる側面がそれぞれ異なるので、ひとつの土俵で議論を進めるのは難しかった。文字数の制約があるので、最後に議論の対象として残った二つの提案について触れたい。

東日本大震災後の防潮堤整備の状況に注目し、そのプロセスを確認する作業を通して、今日の日本におけるものごとの決定プロセスを記述することを目指した阿部氏の提案には、いくつかの視点で魅力を感じた。東日本大震災の災害としての状況やその後の防潮堤やまちづくりの様子に関心をもったというよりは(もちろん、それらにも興味は引かれるけれど)、ものごとがどのように決められていくのかを冷静に記述しようという態度に、今日の、日本の建築を取り巻く状況の一端が確認できるようになるという意味で意義を持ち得ると感じたからである。もちろん、それらの情報から生まれるであろう建築の職能や制度を巡る問題意識は、日本に留まらない広がりのあるものになるだろう。来年行うのがタイミング的に少々早いかもしれないということや、これまでのベネチア・ビエンナーレで震災に関連したテーマが比較的多いことなどが課題として指摘され、残念ながら選定には至らなかった。何かしらの機会を得て、実現されることを切に願う。

今回選定された貝島氏の提案は、自らが手がけたメイド・イン・トーキョーを含め、そういった建築のガ

イドブックが相互に影響を与え合いながら世界中に広がっていく様子に注目することで、今日の建築の状況を民俗学的に確認しようというものである。ガイドブックのつくられ方が国を越えて広がっていくという状況自体が興味深いものだった。また、ピロティ部分に路地的な場を設けられ、建築を巡る議論が継続的に行われる。そのライブな様子にも期待をしたい。

#### 塚本由晴(東京工業大学教授)

日本館であるから当然ではあるが、日本の建築・都市の状況をどのように発信するかについて、的確な視点を持った熱のこもった提案が集まった。限られた時間の中で提案をまとめていただいた候補者のみなさんに感謝したい。それぞれの提案に触発されながら、日本館をどうプロデュースするのかということを考えながら内容を吟味した。

旬の作家を発掘し、世界に向けて紹介するワンマンショーというアート・ビエンナーレの在り方とは違って、近年の建築ビエンナーレはキュレーションによって議論の枠組みを示す方向に活路を見出しつつある。個の作家の元に示される主体性に対し、建築・都市が不可避的により多様な関係性によって成立するものという認識の広がりがある。だが、その展示化は容易ではない。まず情報が多様で拡散的になるぶん、ストーリーを理解してもらうのに時間がかかる。デリケートな話題も含まれるので、公平性も必要となる。だが各国館における一人当たりの滞在時間は短い。駆け足で鑑賞されることによる誤解を覚悟しなければならない。また展示することは対象を「寿ぐ」ことであることを忘れてはならない。そのことによって勇気付けられる、作者と対象の組み合わせが望ましい。さらにビエンナーレ自体がヴェニス観光の一翼を担っているだけに、日本館も観光のまなざしに晒される。観光情報や自治体の広報のように消費されてしまうのを避けるには、そのまなざしに素直に応える個別事例の紹介以上の何かが必要である。

各案とも見所が多く、選考は容易ではなかったが、上記のような検討に照らすと、貝島桃代のドローイングを用いた「建築民族誌」の提案が、建築ビエンナーレにおける新たな方向性を示していると思われた。その特徴は、『メイド・イン・トーキョー』で提示された東京発の都市観察の方法が、世界の各地で勝手に用いられ多くの成果を生んでいるというグローバル軸と、農村や漁村にも用いられて都市と後背地の境界を融解させるテリトリアル軸を併せた射程を持つところである。国外の建築研究者、美術系のキュレーターとの協働がこの特徴を補強するのに役立つだろう。また建築や都市を人々の生きる条件として発見的に見つめ批判する方法の提示は、量的成長に奉仕する 20 世紀後半に確立された建築教育を脱・学校化することになるところも特徴である。研究からプロジェクト(創作)への展開、そして相互フィードバックについても言及されているが、この部分は明確ではないのでさらなる検討が望まれる。この総体を「建築民族誌」という言葉で簡潔にまとめることは容易ではないが、成功すれば西歐的価値に主導されがちな建築文化の世界に、日本発の建築理論・方法として一石を投じることができると期待している。